

多様性の中にある私

氷上中学校 2年 足立 美樹

最近、『多様性（ダイバーシティ）』という言葉をよく耳にする。『多様性』とは、様々な社会、民族、性別など、それぞれの人がもつ多種多様な状況のことだそうだ。そして、個人の違いを認め合い、尊重し合うことも含めて『多様性』というそうだ。

私は、この言葉がとても気になっている。なぜなら、私はマイノリティだからである。病気があり、電動車いすを使って生活している。みんなと同じようには行動できない。うまく友達の輪に入れないことが多いし、みんなの中にも疎外感を感じることもある。また、心ない言葉に傷つくこともある。

私は、小学生の頃、そのうまくいかないもどかしさは、病気のせいだと思っていた。ところが、中学生になり、そうではないのではないかと思い始めた。そこで、自分の経験を通して、多様性とマイノリティ、そして人権について考えてみた。

私が過ごした小学校は、一学年一クラスで全児童数が百五十人ほどの小さな学校だった。保育園の頃から同じメンバーで構成され、クラスがえもなく、コミュニティ内のグループは固定され、他の誰かが入る余地もない。マイノリティである自分に自信がなかった私は、自分が嫌で、現実逃避をし、わざとみんなの輪から外れることもあった。固定化されたメンバーの中にうまく入れず、孤独を感じることも多かった。

ところが、中学校は、小学校と比べて少し様子が違っていた。中学校は、五つの小学校から構成された、大きなコミュニティだった。その中で感じたことは、いろんな子がいるということだ。いろいろな苦手を持っている子や、不登校の子、私のようにうまく友だちの輪に入れない子、運動の苦手な子もいる。いろんな子がいて、いろんな悩みを抱えながら学校生活を送っている。

そんな中で、私と同じように友達関係で悩んでいる子と出会った。本の趣味が同じなこともあり、仲良くなることができた。ある日、その子が、私の病気について尋ねてくれた。私が、病気のことについて答えると、

「病気のことを知らなかったから、失礼なことを言ってごめんな。」

と言ってくれた。それを聞いて、私のことを知ろうとしてくれたことがとても嬉しかった。なぜなら、今までは、私の病気を知ってもらう啓発として、みんなの前で話すことはあった。でもそれは、私からの一方的な自己紹介にすぎないものであり、友だちの方から私の病気についてきいてくれたことはなかったからだ。思いやってくれる

友だちの言葉は、今まで目を背けていた自分がマイノリティであるという事実を肯定してくれるものだった。

この言葉が嬉しかったのは、私の心によりそってくれたからだ。マイノリティへの理解には、よりそう気持ちが大切だと友だちは教えてくれた。また、人とのつながりには、病気やマイノリティであることは関係ないと気づかせてくれた。

私にとって、固定化されたコミュニティよりも、いろんな人がいるコミュニティの方が過ごしやすい。それは、その中に自分に寄り添ってくれる人もいて、自分の居場所を見つけることができるからだ。

でも、いろんな人がいるというだけでは、『多様性』が認められているとはいえない。一人ひとりの違いを知り、その人の心に寄り添いながら、その人にしかない良さを認めたり、その違いを大切にしたりすることで、初めて本当の意味での『多様性』があるといえるのではないかと思う。

『多様性』がある社会は、きっとやさしくて自由な社会だろう。私は、そのような社会をつくるために、小さな一歩を踏み出してみたい。一つ目は、困っている人や悩んでいる人の心に寄り添えるようになりたい。マイノリティである私だからこそ分かることもあるはずだ。二つ目は、自分が『多様性』の中の一人として、ありのままの自分を認めていきたい。

未来をつくっていくのは私たち一人ひとりだ。人にやさしく、誰にとっても居場所がある。それが『多様性』なのだ。それに向かって、私なりに進んでいきたい。